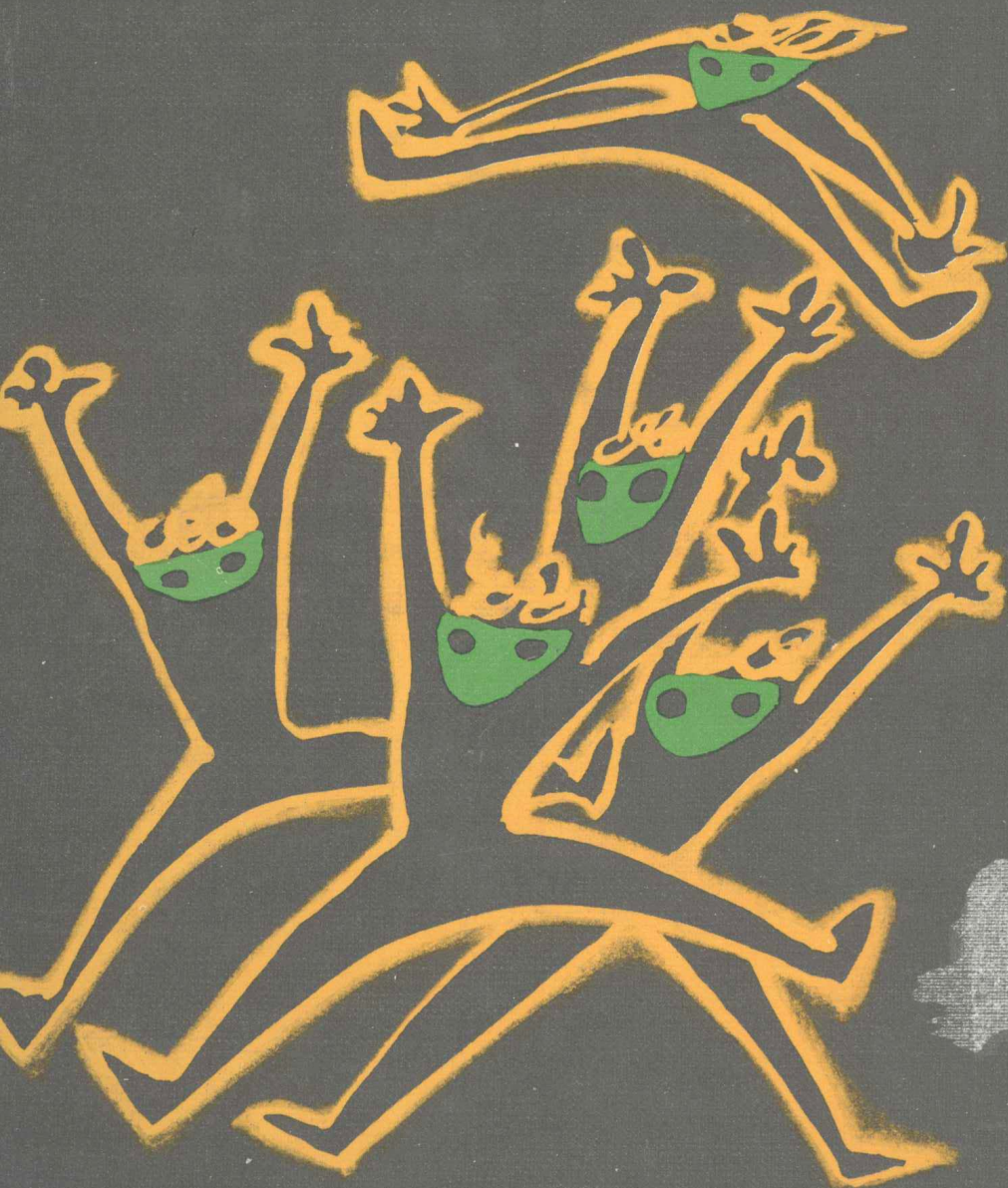


みどりの仮面

ホルゲル・ブック作

島原落穂訳



983 ブック, ホルゲル

みどりの仮面

ホルゲル・ブック作 島原落穂 訳

岩波書店 1971

278p 21cm (岩波少年少女の本 15) 小学 5,6 年以上

(参考) Пукк, Холгер : Зеленые Маски. 1962

岩波少年少女の本 15

■みどりの仮面

定価八〇〇円

一九七一年十二月七日 第一刷発行 ©

訳者 島原落穂

発行者 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

岩波雄二郎

印刷者 長野市中御所二ノ三〇 田中忠

発行所 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

株式会社岩波書店

本文印刷 大日本法令印刷株式会社

製本 株式会社三水舎

表紙・箱印刷 錦印刷株式会社

みどりの仮面

ホルゲル・ブック作

島原落穂訳



岩波書店

も
く
じ



10	ポツリ薪 まき をつくる……	138
9	ピオネール集 しゅうかい 会……	126
8	ペエテルは考えをかえない……	111
7	これが立 りっ 派 ぱ なこと？……	98
6	不思議 ふしぎ なポスター……	84
5	ペエテルのひろったもの……	66
4	みどりの仮 か 面 めん がまた……	54
3	また敵 てき のマークが……	39
2	家で……	27
1	不思議 ふしぎ なできごと……	11
	著者 ちよしゃ のことば……	9

11	またまたニュース……	147
12	たんでいペエテル……	171
13	三対一……	179
14	ヴァリテル罰をうける……	189
15	映画館で……	209
16	秘密グループ……	218
17	仲間入り……	238
18	秘密はとけた……	254
19	はじめての作戦……	267
	あとがき……	275

さし絵 B・カラウーシン
装幀 金子三蔵



みどりの仮面

島原落穂
訳

ホルゲル・ブツク作

著者のことば



Kourepnyek

親愛なる日本の少年少女のみなさん！

みなさんが飛行機にのって、北西にむかつてとんでいくとしましょう。日本海をこえ、アジア大陸をよこぎり、ウラル山脈も、モスクワもこえていくと、バルト海の岸、ソビエトの西の国境につきます。人口たった百万のソビエトの共和国、小さなエストニヤは、そこにあります。

みなさんは、エストニヤの首都タリン市で、飛行機をおります。エストニヤの子どもたちがむかえにきています。子どもたちは「ウラー」とさけんで、みなさんに花束をさします。たくさん、たくさんのお花です。赤、黄、白、青……

エストニヤの子どもたちも、日本の少年少女と同じように、とても花が好きです。大切なお客さまのみなさんを、花でよろこばせようとしているのです。

日本とエストニヤとは、何千キロもはなれています。わたしたちはおたがいにことばはわかりません。

著者のことば

でも、自然への愛が、みんなの心を一つにむすびつけるのです。

小鳥のうた、小川のせせらぎ、公園のみどり、森のさざめきが、みなさんをよろこばせます。なぜって、みなさんもハイキングにいくのが大好きでしょうし、公園に花を植え、小鳥や動物を飼うのが好きでしょうから。

わたしたちの共通の友だち、自然は、大切にまもっていかねばなりません。でも、まだ、花をふみつけたり、動物や小鳥をいじめたりする人たちがいます。

これからみなさんのよむこの本に、わたしは、エストニヤの子どもたちが、どのように自然をまもっているかをかきました。

エストニヤではこういわれています。「一生にたった一本でもいい、木を植えたことのある人は、けっして一生を無駄にすごしたのではない」と。

みなさんも、祖国のしあわせのために、よろこんで力づよく木を植えるよう、わたしは、心からいっています。

一九六八年二月　タリン市にて

みなさんのホルゲル・ブック



不思議なできごと

あるしずかな、あたたかい九月の夕方のことだった。

太陽は、街はずれの果樹園のリンゴの木の梢にかかって、そこいらじゆうを金色にそめ、まるで別れをおしんでいるかのように、ゆっくりと、建ちかけのヴァリテルの家のむこうにしずんでいった。空にはわずかに赤むらさきの雲がのこったが、その雲の色もしだいにうすれて、ついにすっかり色をうしない、うす水色の空に、一つにだけこんでしまった。

あかるいあま色の髪の毛の、青いジャケットの、ずんぐりした少年が街かどに立ち、のけぞるように夕やけの空に見とれていた。

少年は夕陽を見るのが大好きだ。とりわけ夏のあいだ、おじいさんの家にとまりにいつていたときは、どんなに夕陽を見るのがたのしかったことだろう。おじいさんの家から海までは、石を投げればとどくぐらいの距離だった。まいにち夕方になると、入江の水が目も痛いほどきらきらと夕陽にきらめいた。垣根のくいをしっかりとに

ぎって、ぼくは、いま船ふねのですりにつかまって立っている、と空想くうそうするのは、どんなにたのしかったことだろう。空想くうそうの船ふねはスクリースクリーーの音をたてて、知らない国たひだへと旅立たびだっていくのだった。

少年はやっと我われにかえった。通とほりのむこう側がはの公園こうえんから、一日の仕事しごとに疲つかれたような、ゆっくりとした槌つちの音がきこえてくる。ものうげに、まるでいやいやたいているようにトーン……そしてもう一度たたく前に、長い間まをおいて、ひと休みでもしているようだ。

どこからか、かすかな笑わらい声がきこえ、すこしたって、こんどは、大きななり声がきこえる。どこかで子どもがしかられているのだ。ゴリゴリゴリゴリ、のこぎりの音もきこえてくる。

夕方ゆうがたのやすらいだしずけさが、家々も、木々も、青いジャケツの少年をもつつんでいる。

少年は、もう一度、夕やけの空をながめ、ぎっしりつまった学校かばんをもちかえて、歩きだした。

けれど、まだいくら歩かないうちに、夕ぐれのしずけさをつんざいて、「キャン、キャン」と、はりさけるような犬のなき声がきこえてきた。むちで、ピシッ！と、たたかでもしたようななき声だ。

青いジャケツの少年は、立ちどまって耳をすました。彼は建たちかけのヴァリテルの家の、ねずみ色のスレート屋根やねに目をやった。

犬がまたなく。かん高く、困こまりきって助けをよんでいるようだ。

そうだ。まちがいはない。助けをよんでいるあの声は、ヴァリテルの新あたしい垣根かきねの中からきこえてくる。

二、三步で道をとんで横切よこぎると、少年はかばんを垣根かきねごしになげこみ、ちょっと身みがまえて、ひらりと垣根かきねをとびこえ、やわらかい地面じめんに両手をついたまま、また耳をすました。

犬が、キャン、キャンと、またなく。

青いジャケツの少年は、ジャガイモの茎や根をふみつけながら、ヴァリテルの家めがけてはしりだした。エゾイチゴの繁みのあいだをぬって、家のうらの物置までいき、立ちどまった。泥のついた両手を物置の壁にかけて、注意ぶかくあたりを見まわした。建ちかけの家のまっくらな窓。ごみや木ぎれがいっぱい散らかっているうら庭。黄色いおがくずの山が二つ。

どこにも、誰もいない。

そら耳だったのだろうか？ なき声のきこえてくる方角をまちがえたのだろうか？ そのしゅんかん、少年の耳は、ぼそぼそとしやべっている人



声をとらえた。誰かが、厚い壁のむこう側か、地下でしゃべっている。

少年は、おがくずの山をまわり、コルタールのにおう家の壁に、びったりと身をよせた。

犬がまたなく。とてもかなしそうな声だ。その上、あまり近くて少年がびくつと身ぶるいをして、思わず後ずさりしたほどだ。少年は地下室の窓をのぞきこんだ。

窓のすぐそばのひくいテーブルの上に、学生服の少年が三人、ひたいをよせあつて、かがみこんでいた。三人の前には、白いぶちのある黒い小犬が一びき、絶望しきつて、身もだえていた。

少年のひとりは、両手で犬をテーブルにおしつけていた。ひとりは、一生懸命に犬の口をおさえ、もうひとりは、しっぽをつかんで斧をふりあげていた。

「何をするんだ！」

青いジャケツの少年は、いかりにふるえる声でさけぶと、同時に、窓わくに手をかけて、窓のすきまに足をいれ、地下室にとびこんだ。あつという間に、もう少年は、しっぽを切ろうとしているやせた少年の前に立っていた。

いなずまのような一撃が、斧をふりあげた手にあたった。ガチャン！斧が石の床におち、犬ころしの少年は、たちまち壁の方へとびのいた。

あとのふたりもとびのいた。小犬はそのすきに、助かったしっぽをたれて、鉄砲玉のように階段をかけるのぼっていった。

青いジャケツの少年は、ふりかえりざまに、ひとりをピシャリとたたいた。もうひとりは、すばやく逃

